

我思う、故に我有り。

1981年度卒 長谷川 衛

西海研究室30周年、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

大学を卒業してから、もう27年も過ぎてしまったとは、とても信じられませんが、月日が経つのは、本当に早いものです。最近、つくづく思います。

我々の西海ゼミの年度は、先生がカナダのエドモントンから帰国されたあとの、初めてのゼミ生と記憶しています。外国での生活習慣で、3時にコーヒブレイクをと先生が自ら、お菓子を持参して、振る舞ってくれたことを今でも覚えています。

4年になって、ゼミでの学生生活が始まって感じたことは、工学部機械工学科の中の化学機械分野のゼミで、当時は機械工学の中では、異質であったように思います。機械屋としてのイメージを持っていた自分としては、研究室の中に入ると、フラスコやピペットを見た時、正直、ちょっと違和感を覚えました。

現在、化学会社に身を置いていることを考えても、社会に出てから経験することは、自分で思い描いていることとは、まるで予想もしない変化の中で成されるのだと実感させられます。現に、今はエンジニアリング部門にいて、技術部門からの特殊仕様装置の開発要求、工場の設備設計から、それらを設置する建物の建設にまで係わっています。所属するエンジニアリング部門が分社化し、本年、建設大臣認可取得を予定し、建設を生業にした関係会社に身を置いています。入社したDIC株式会社(旧大日本インキ化学工業株式会社; 2008年4月に社名変更)のエンジニアリング部門は1999年に分社化し、機械装置系はもとより、混練・分散、充填、プラント系、コンバーティング、情報、シーケンス、電気・計装、建設とありとあらゆる分野に係わるようになり、自分の専門というものの境界が無くなっていっていると実感するのが現実となっています。

そんな現在を思い、学生だったときの西海ゼミでの自分を考えるとその時の違和感自分自身の世界の小ささを今、気付かされます。いつだったか、実験が終わったある日に、今日は充実した1日だったと、自分自身で自己満足の言葉をつぶやいた時、先生が、すかさず、「結果が大事なんだよ。いくら労力をかけても結果が出なかったらしょうがないからね~。」と一言。今では、仕事上で最終目的である成果を考え、その目標の為に各工程で、何をすべきかを考えて進めていますが、結果を出すというアウトプットを求める姿勢が大事で、しかも結果を出すことに意味があると教えて頂いたのだと思います。

また、先生がツールとしてのコンピュータを積極的に利用されていたことも印象に残っています。当時としては、学生にオフコンを制限があるとはいえ、ある程度自由に使わせていたのは、大学の中では自由度が高かったと聞いていました。最初はコンピュータ演習でカードに穿孔機で穴を開け、読み込ませて結果を出力させていたのが、ゼミではTSS端末を利用し、FORTRANを最小自乗法で近似式を求めるプログラムをコー

ディングしたのは、一種誇らしいものでした。今では、パソコンでさほど難しくなく出来てしまうと思いますが...

今では信じられませんが、私が入社した1982年当時はコンピュータを使うことに恐怖心があり、なかなか手を付けたがらない雰囲気がありました。その時の経験が、幸い私の新しもの好きの性格も手伝って、廻りより積極的に取り組めたと思います。先生の影響がいい意味で強く作用した現れだったと思います。また、先生は、お酒を飲んだ後でも気が済むまで仕事をする熱い人間ですが、その反面「人間は共通の興味と利害でしか繋がっていないんだ。」と、ドラスティックなこともおっしゃっていました。先生の一步引いた広角度な冷めた目でものを見られるもう一つの一面だと思いました。(先生もあのときは、若かった?)

今、技術系の企業では、2007年問題を回避するための再雇用後の2010年以降問題、技術伝承、環境問題、コンプライアンス、内部統制、CSRと直接的に利益を生まない対応にエネルギーを費やされています。企業が利益を確保出来なければ成り立たないのは当たり前ですが、それだけでは済まされないのも時代の流れあり、僅かな不正の発覚が企業の命取りになるのも、最近のニュースでは事実として証明されています。

また、技術伝承問題も、ただ、知識としての問題解決方法を記録として残すのでは本当の技術は伝わらないと思います。苦労した問題解決の過程において、如何に自分の頭を使って苦労し、悩み、自らその壁を越える為にはどうしたらいいかを経験することで技術が伝わるのではないかと考えます。そして、その環境に置かれるチャンスを得ることだと思えます。

これからは、企業としての責任を果たすためのこれらの対応をビジネスチャンスに繋げていかなければ、生き残れない時代になって行くのではないのでしょうか。ただ、このような深刻な問題に頭を抱えるだけでなく、創造力を生む土壌を育む、明るい、安心出来る環境と雰囲気作りをして、楽しく仕事と遊びをしたいものです。

そのために、官学民がコラボでき、イマジネーションを活かした過去の前例に囚われない新しい発想が必要な気がします。そのための大学の役割は大きいのではないのでしょうか。

「我思う、故に我有り。」は、デカルトの有名な言葉ですが、この世で、「全く疑う余地のないこと」は、何だろう? と考えた時、例えば、目の前にある世界は、本物だろうか? これは幻なのかもしれない。夢なのかもしれない。夢を見ているとき、これが夢だとは気がつかないではないか。

今、見ているものは、実際には存在しないのかもしれない。これが夢、幻じゃないと、どうやって証明できるだろう。そんなことは、原理的に、決してできない。数学は? 学問は? 論理は? それが正しいと思うのは、思い込みかもしれない。夢をみているとき、論理的におかしなことが起きても、それをおかしいと感じないではないか。

では、やはり「絶対的に正しい」と宣言できるものは 何もないのか？ 疑って、疑って、疑い続け、それでも正しいといえるものは何かを根気強く考え続けた結果、「我々が認識するものは、すべて嘘かもしれない。でも、それを疑い続けているものがあるということだけは真」であると。たとえ、「疑っている」ということを疑ったとしても、やっぱり「何かを疑っている」ことは真なのだ。

たとえ、すべてが夢であっても、その夢を見て、夢じゃないかと疑っている自分が存在することは決して疑えない。この世のすべてが、信じられないものであろうとも、それを『疑っている何者かが存在すること』は、絶対的な真実なのだ。これが「我思う、故に我在り」という言葉の本質的な意味であるそうだ。デカルトは、この言葉を「決して疑えない確かな真実」として、哲学の第一原理にすえたそうだが、「大学が創造を生み出す場であり続けて欲しいと考える自分自身が存在していることは紛れもない真実である。」と思う我有り、である。